

人との関わりを大切に、よりよいモノづくりを目指す

相馬さんは、「よいモノづくりには人とのコミュニケーションが欠かせない」と語ります。そこにはモノづくりとは様々な人との協同作業であるとの思いがあります。相馬さんはモノづくりに携わることの矜持を持ち、後進の指導にも余念がありません。



そうま・じゅん ● 1972年、山梨県生まれ。高校卒業後、株式会社東芝に就職。交通システム部に配属になり、主に車両の主電動機やエレベーターの巻上機などの組み立てに従事。「令和元年度東京都優秀技能者(東京マイスター)」受賞。海外での仕事も多く、後進の指導にも力を注ぐ。現在、東芝インフラシステムズ株式会社府中事業所交通システム部交通装置製造第二課で技能主務を務める。

電動機組立・調整工 相馬 純さん

「手に職をつけた」といふ思いが、モノづくりの仕事へ

——もともとモノづくりには興味があったのですか。

相馬 機械をいじるのは好きでしたが、とくにモノづくりに強い興味があったわけではありません。私は普通高校の出身で、モノづくりを勉強するという機会もありませんでした。モノづくりそのものへの興味というよりは、「手に職をつけたい」という思いが強かったですね。

——実際に仕事に就かれて、自分が思っていたこととのギャップのようなものはありませんでしたか。

相馬 正直、最初は大変なことばかり

でした。こちらから質問して初めて先輩たちは答えてくれるのですが、その答えはすべてをカバーするものではありません。しかし、自分が困っているところ、ほかの先輩がサポートしてくれる。試行錯誤しながら一つのものを作りに上げると厳しかった先輩がほめてくれる。そういったことを繰り返しながら、仕事を覚えていきました。

このような勉強は学校ではできませんよね。次第に一つひとつ違う部品を成形して取り付けて、何かを作り上げることにおもしろさを感じるようになりました。

——これまでどんな仕事をされてきたのですか。

相馬 入社してすぐに交通システム部という部署に配属になり、それ以来、ずっと同じ部署で働いています。私が主に担当してきたのは、車両の主電動機やエレベーターの巻上機などのモーター関係の組み立てで、国内外において、その仕事に携わりました。

様々な鉄道車両の主電動機、台湾の超高層ビル台北101、大阪のアペノハルカス、東京のスカイツリーに使用される大型エレベーターの巻上機の組み立てにも携わりました。

自分の作り上げたものが問題なく動いたときの喜び

——仕事の中でおもしろさや、やりが

いを感じるのとはどんなときでしょうか。

相馬 やはりモーターを組み立てた後、実際に動かして問題がなかったときは、とても嬉しいですね。と同時に大きなやりがいを感じます。

また、図面では簡単に書いてあるけれど、実際にはなかなか難しいということもあります。それを様々な工夫をして問題なく稼働できたときも嬉しいですね。「やったー」という思いがこみ上げてきます。

また、新しく開発されたものを組み立てる作業の場合は、これまでのものとは違う方法を考え、パーツを組み合わせていきます。それが形になり、うまく動いたときには、言葉では言い表せないほどの喜びがありますね。

——仕事の厳しさや難しさを感じるのとはどんなときですか。

相馬 こうした仕事をしていると、ときに図面どおりにできないことがあります。図面どおりにできない場合、どうすれば図面どおりになるかを考え、加工を加えます。そんなときに間違いない判断を下すのは、自分の経験に裏打ちされた知識や技術です。

また私は、メンテナンスやスタッフの指導で海外に行くことも多いのですが、言葉では微妙なニュアンスが通じにくいことがあります。同じ意味の言葉でも、現地の人々とは捉え方が違うのです。そんなときは、実際に自分で



若手へのモーター組み立て指導▶



新機種があるときは、その都度指導を行う。

◀軸受けの組み立て指導



海外での技術指導の様子（南アフリカにて）

その作業をやって見せながら教えるようにしています。

——何か思い出に残っているような仕事はありますか。

相馬 初めての海外出張で苦勞したと、先輩たちからサポートしていただいたことなど、様々な思い出があります。

そうした思い出の一つにスカイツリーに私が組み立てを担当したエレベーターを設置したときの苦勞があります。このエレベーターは超大型で、振れが出たのです。「コンマいくつ」の微妙な調整が必要で、それをどのようにして改良するか、苦心しました。

正直、問題の原因を突き止めるのは大変です。でも問題の解決を図るために必死になるときは、どこかに楽しさのようなものもあるのです。

——機械は予想しない故障が起きる場合がありますね。そんなときはどのように対処されるのですか。

相馬 私が担当しているのはモーターの組み立てですが、モーター自体は不具合を起こすことがあまりないと言ってもよいでしょう。むしろその周囲のパーツに異常があり、おかしな力がかかって不具合が生じることが多いですね。

そうしたことを踏まえながら、どこに問題があるかを探し当て、改善を図ります。また、それを設計者にも伝え、変更をお願いしています。不具合が出

てしまったら、二度と同じ不具合が出ないように考えます。

——お仕事をやる上でどんなことを心がけていらっしゃいますか。

相馬 モノづくりの仕事は、自分一人ではできないことが多いのです。だから私は、自分が担当する仕事の前工程や後工程に携わる人たちとのコミュニケーションを欠かさないようにしています。様々な分野の専門の人たちと情報を取り上げることが、製品の品質に結び付くのです。「いいモノ」を作るには、人とのつながりが大切です。私がかれまでやってくることができたのは、様々な方たちが協力してくれたからだと思っています。

また自分が作ったモノに直接触れることも大切になっています。直接に触れることで、目で見ただけでは分からなかったことが分かるものなのです。

一つでも得意なことを見つけて、それを伸ばす

——後進の指導にも携わっていらっしゃいますね。そのときは、どんなことを心がけていらっしゃいますか。

相馬 今の若い人たちは、分からないことがあっても、自分から質問することが少ないように感じています。私はできるだけ自分から「どうしたの？」と先輩たちに声をかけ、アドバイスをするようにしています。

——多くの若者が仕事の厳しさに戸惑っているように思います。また仕事におもしろさを感じることができない若い人も多いようです。彼らへのアドバイスをお願いします。

相馬 仕事は厳しいものだし、辛いことが多いですよ。その中で一つでも自分が得意なことを見つけ、それを伸ばしていつか頂点に立つことを目指してはいかがでしょうか。仕事はつまらないと思うと、どんどんつまらなくなってしまうから……。

——モノづくりの仕事に携わる若者が少なくなっているという問題があるようです。どのようにお考えですか。

相馬 私はモノづくりはとても楽しい仕事だと思っています。なぜ若い人は敬遠するのでしょうか。

モノづくりの分野にはIT技術を使った自動化も図られています。自動化できるものは進めれば良いと思いますが、一方で「人の手」によるモノづくりも大切ではないでしょうか。

出来上がったときの感触を自分の手で確認する喜びは何にも代えがたいと思います。自動化と人の手による作業がうまく組み合わさることで、より効率的な仕事をするようになれば、最高ですね。若い人たちには多少手が汚れても、自分で作ったモノに触れる喜びを味わってほしいと願っています。